

久しぶりに梅花と道龍の顔を見に行った。皆達者にやつて安心した。

俺を師匠と慕って付いて回る道龍に毎度稽古をせがまれるのにやうんざりしたが、後から振り返りやいい思い出だ。五十嵐は白髪が増えた。梅花は綺麗だった、相変わらず。道了に虐げられてびくびくしてた頃に比べたらよっぽど生き生きしてる。真心こもったもてなしと手料理は最高だった。梅花が腕によりをかけてこしらえた肉粽は俺の好物だ。

たらふくご馳走食ったあとは昔馴染みんところを回って思い出話に花を咲かせた。凱は娘の結婚が決まって泣いていた。見苦しい泣きつ面に笑うのこらえるのが大変だった。

俺ときたいなら娘に発情しねえと証立てられと脅され、互いの竿を切り落とした残酷兄弟も泣いていた。リョウとビバリーは渋谷のスラムに潜伏し便利屋を営んでいた。要領よく立ち回ることにかけちや天下一のリョウが仕切ってるんでばちばち儲かるらしい。

「ドラッグの運び屋とかやってんやねえだろな」

「人聞き悪いなうちよつとでも長生きしたいからドラッグはやめたの。シャブ抜けするの大変だったんだからほめてよ」

「ヤクと切れたのは結構だな。せいぜい余生を楽しめ」

ロリポップをちゅばちゅばおしやぶりするリョウの後ろじやビバリーがゴツイヘッドセットを装着して端末に前のめり、ハッキングに精を出す。

「あゝアメリカ国防総省に弾かれたつす、前回の反省を生かしてセキュリティ強化したつすね！ 燃えるつす！」フル稼働する脳が膨大なカロリーを消費するのか、音速の両手で打鍵しながらハーシーのチョコを齧ってた。行儀が悪い。

「そーだ、ロンが立ち寄った時に渡してほしいつてキーストアに頼まれたんだ」

「アイツに？」

久しぶりに聞く名前に心臓がはねる。リョウが悪戯っぽく含み笑ってロリポップを噛み砕く。

「キーストアとサムライも薄情だよ、人伝に頼むなんて地獄で生死を共にした仲間なんだから直接会って積もる話をすりやいいのに、会いたくない事情でもあるのかな」

「性根の悪さは変わってねえな、逆に安心したよ。鍵屋崎とサムライは入れ違いで国外にでてる、今頃は韓国でヨンイルと飲んでんじやねえか？ 真つ先に会いに行くなら道化だろ」

「なんだ、知ってたの」

リョウが露骨に舌打ちする。興ざめだといわんばかりの不

満顔、憎たらしいアヒル口を抓りたくなる。正直会えないのは残念だが、元気でやってんならそれでいい。

「てかキーストアとサムライ脱獄してからずつと警察の包囲網がいくぐつて逃避行してんだよ、ヤバくない？ ハネムーン長すぎでしょ」

「漸く手に入れた自由ってヤツを謳歌してんだろ」

俺が覚えているのはイエローワークで一一緒に汗水流した鍵屋崎だ。頭がすこぶるよくて口が悪い、クソ生意気な天才野郎。あの頃は一日中炎天下の砂漠で穴を掘り続けた。手のひらにできた血豆が潰れても弱音を吐かねえから、モヤシのくせに意外と根性あるじやんと見直した。汗で眼鏡のレンズが蒸れるのにはまいつてみたいだが……

眼鏡を外して汗をぬぐうしぐさを回想して笑えば、リヨウがポケットからあるものを取り出す。

「あげる」

「何……げっ！」

一瞬心臓が止まった。リヨウが掴んだのが眼球だったから。すぐに偽物だと気付いて安堵する。

「義眼かよ、びびらせんな」

「戦場でもつとグロい見慣れてんでしょ？」

「不意打ちに弱エんだよ」

「キーストアから預かり物、ロンに渡してくれって。レイ

ジに贈るんでしょ？」

あらためて手にとりひねくり回す。非常に精巧な義眼だ。中にはナノ単位の精密機械が仕込まれていて、眼窩に嵌めこむと自動的に視神経に接続されるんだそうだ。天才の設計はさすがによくわからねえ。説明してるリヨウもよくわかってねえ。

「えーとね、早い話コイツを目にぶちこむと内部のセンサーがういーんと起動して手術をはじめるの。完全にオーダーメイド、レイジ専用に調整された義眼」

「アイツ本当に天才だったんだな。眼鏡は伊達じゃなかったわけだ」

「無駄に眼鏡じゃなかった」

二人して妙な感慨に浸つてるとビバリーがチョコを啜えて振り向く。

「ビームでるっす？」

「でるかも」

「でねえよ」

「やってみなきやわかんないでしょ試してよ」

「目ん玉ほじくれよ突っ込んでやつから」

ジト目で脅せばリヨウは首を竦めて降参し、ビバリーが朗らかな笑い声を上げた。

「キーストア優秀な技師になるっよ、サーシャの分も作っ

てやったらいいのに」

「義眼までおそろいは勘弁しろよ、仲良すぎ」

「ひよつとして妬いてる？」

「ざけんな」

リヨウとビバリーにからかわれて早々と退散する。ボケツトから出した義眼をお天道様に翳し、感嘆のため息を吐く。

「綺麗だな」

初めて会った時のレイジの瞳の色を思い出す。俺ん中に鮮烈に焼き付いた色。太陽の光を浴びて輝く人工の瞳は、インペリアルトパーズのようにきらめいている。

本音を言えば、リヨウを介さず直接受け取りたかった。大事な相棒の瞳を一番最初にさわるのは俺じゃなきゃいやだった。

リヨウの指紋が付いてないかよく確かめ、服で擦ろうとして思いとどまる。かえって雑菌が入るといけない。キスなんてもつてのほかだ。というか、義眼にキスしたいとか妄想する時点でおかしいよな。

日本で過ごした日々は楽しかった。

帰っちゃいやだ俺も行くところねる道龍をひっpegし、別れを惜しむ梅花と五十嵐に手を振って船に乗り込み、三時間前にフィリピンに到着した。

俺は現在世話になってるレジスタンスの野営地に赴く。マ

ニラから南東に10キロ、泥川沿いの密林の中にある広場。固く均された地面をブーツで踏み、周囲に並んだ帆布のテントを見回してたら次々と顔見知りか声をかけてきた。

「よーロン、彼氏がお待ちかねだぜ」

「日本はどうだった？ 女はいくらで買える？」

「買ってねえよ。レイジは？」

「テントにいんじやね？」

弾薬や機関銃を詰めた木箱を抱えて運ぶ連中がとぼす野次を雑にあしらい、目的のテントの布をまくりあげる。

「帰ったぜ」

第一声はテンション低めにストレートに行く。テントの中は見苦しくねえ程度に片付いていた。さっきまでレイジがいた証拠に組み立て途中の機関銃が寝かされている。

「かくれんぼか」

拍子抜けだ、いると思ったのに……たつた数日離れてただけで体当たりかましてくるのを覚悟したら、予想を裏切られて困惑する。

「……いい子で待ってろよ」

まさかマニラに女買いに行つたんじゃないやねえだろな？ 相棒の浮気を疑い、足元のエロ本を摘まみ上げる。一部ページが糊付けされて開かねえ。嫌な予感。

「そんなにたまつてたのか」

「袋綴じだよ」

プシユと祝砲が撃たれる。

できるだけ雑誌を遠ざけて振り向いた直後、顔面に盛大な泡が飛び散った。背後じや迷彩柄の野戦服のレイジが瓶コーラを構えていた。

「やーいドツキリ成功、冷え冷えのコーラ目エ覚めた？」

「アホくさ」

「ツレねえなあ、祝杯上げたくて川まで取り行つてたのに」

「あの泥川に浸けたのかよ」

「瓶に入つてつから大丈夫だろ。おかえりロン」

「ただいま」

顔から首へ伝うしずくを拭つて笑えば、片手に持った瓶を叩つたレイジがいたずらっぽく囁く。

「行水にする？ コーラにする？ それとも俺？」

無事な片目が挑発的に細まって唇が弧を描く。俺はコーラが服に染みて酷い有様、素肌に布が張り付いて気持ち悪い。道龍のこと梅花のこと五十嵐のこと、リョウウのことビバリーのこと鍵屋崎のことサムライのこと、話したいことは山ほどあるのに手荒な歓迎で全部吹っ飛びしまった。

「でっかくなつてたぜ、道龍。あと何年かすりやお前を追い越すかもな」

「マジ？ 盛つてね？」

大袈裟におどけるレイジの手から瓶をひつたくる。炭酸特有の清涼感が喉を経て五臓六腑に染み渡る。

何日かぶりに見たレイジは相変わらずの男前で、めちやくちやにしてやりたくなる。

「留守中禁欲してた？」

「お前の事考えながらマスかいてた。そつちは？」

「道龍と添い寝してた」

「浮気はだめだぜ」

「ガキに欲情する変態じやねーよ。寝相が悪いからあちこち蹴つぽられた、きつと親父譲りだな」

「わんぱくに育つてんじやん。名付け親に似たんじやねーの」

「早く大きくなつて王様ぶつ倒すのが目標だとか息巻いてたぜ、下剋上警戒しろよ」

軽口を叩き合いコーラを回し飲みする。レイジの片目が愛おしげに和み、唇が緩む。

「ロンのエロい顔思い浮かべて五回イッた」

「回数報告すんな。引く」

「お前は？ 梅花んちに世話んなつてたんじやヌケねーよな、ずっと我慢か」

俺の髪の毛に指を通し、頬に手を添えたレイジが舌なめず

りし、首筋を濡らす液体をうまそうに啜る。くすぐったくて声が出そうだ。

目の前で微笑む男が俺の手を掴み、もったいぶって野戦服の下にもぐりこませる。レイジの乳首は勃っていた。下は確認するまでもない。

「抱かれてえ？ 抱きてえ？ どっちでもお望みのままに」
「発情期かよ」

「お前顔見た途端勃っちまった」

甘い吐息に乗じた誘惑が理性を剥ぎ取っていく。レイジが俺の襟首を寛げ、鎖骨のキスマークを確認する。

「殆ど消えちまつてる。念入りに吸ったのに」

「おかげ様でごまかすの大変だった。やめろって言ったのに聞かねーもんな」

褐色のしなやかな指が鎖骨をすべり、限りなく薄れてしまった痣をやさしく吸い立てる。敏感な皮膚にくるまれた突起を甘噛みされ、股間に血が集まっていくを意識する。

「ふ、あ」

「色っぽい声。寝言で喘いでねエよな」

「あたり、まえだ」

「だよな、お前のエロい顔と声をひとりじめできるのが俺の特権だもんな」

決定事項のように言い渡されてむかつ腹が立った。先に進

もうとするレイジを押しつけ、ポケットから例のアレを掴みだす。前戯を中断されたレイジはきよんとしている。

「手エ出せ」

「ん」

大人しく従うのに気を良くし、褐色の手に義眼を捧げる。

同色の片目が驚愕に見開かれ、動揺の波紋が広がっていく。
「鍵屋崎から預かったお前の目。控えめにいつて天才だよなアイツ」

(以下続)